

北九州芸術劇場

公益財団法人北九州市芸術文化振興財団

劇場事業課 舞台事業・広報係 チーフ

吉松 寛子

コロナ禍における劇場の状況と取組み

令和2年の年明けから、新型コロナウイルスの影響により、世間の状況や生活が一変し、北九州芸術劇場では、3月頃より演目の一部中止が目立つようになった。4月以降は、感染対策のガイドライン作成や施設内における感染対策を進めていたが、緊急事態宣言により臨時休館を余儀なくされ、事業中止の判断に頭を悩ませることになった。休館になり、市民の皆さんが劇場へ足を運ぶ機会がなくなることをふまえ、劇場として、どのようにすれば舞台芸術を届けられるか、アーティストをどのように支援すべきか等、様々な課題が持ち上がった。事業の中止は余儀なくされたが、このような課題に対して、事業に特化したオンライン配信企画や、観客（来場者）目線で劇場内を撮影した動画シリーズを YouTube や Twitter で配信するなど SNS を使った情報発信展開にシフトさせていった。これまでの業務とは異なる非接触型の展開は、新たな試みを行う良い機会にもなったが、同時に、直接的に出会えないもどかしさやコミュニケーションツールとしての限界も感じていた。秋以降から事業は順次再開となったが、結果的に、令和2年度は企画されていた全38事業のうち半数の19事業が中止となった（表1）。

表1 R2年度 自主事業実施数（コンセプト別）

区分	事業数	実施数（中止※）	実施率
鑑賞事業（観る）	24事業	11事業(13事業)	46%
創造事業（創る）	3事業	1事業(2事業)	33%
学芸事業（育つ）	9事業	6事業(3事業)	67%
支援事業（支える）	2事業	1事業(1事業)	50%
計	38事業	19事業(19事業)	50%

※中止…一部中止および延期を含む

そういった状況ではあったが、本劇場のコンセプトのひとつである「育つ」学芸事業では、感染対策を講じながら、演劇・ダンスのワークショップや学校アウトリーチなど体験型のプログラムを提供した（一部中止あり）。令和2年度アウトリーチ実施校は、表2の通りである。



図1 (左) 「Re:北九州の記憶」よむ、記憶～オンライン編～

図2 (右) 発信企画「やってみた動画」

※いずれも、オンライン展開の様子。北九州芸術劇場 YouTube チャンネルより

北九州市内でも、運動会や修学旅行などの学校行事も相次いで中止となり、学校内での思い出づくりや校外学習のままならないコロナ禍において、表現力やコミュニケーション不足などに課題を抱える教育現場では、学校アウトリーチ活動が、特別な時間に繋がり、先生方からも高い評価を得ることができた。

また劇場内でのワークショップにおいても、アーティストと参加者同士が直接ふれあう事で、自身を自由に表現することや、他者と分かち合う力を養うプログラム（実施プログラム名称「ダンスダイブ～ワークショップ編（4対象へ実施：①4歳以上の未就学児親子、②40～50代一般、③若手ダンス経験者(高校生～40歳) ④高校生(経験不問)」「こどもプロジェクト あそびのじかん（対象：小学生3～6年生）」）などを実施した。

表2 R2 学校アウトリーチ実施校

実施地区	実施校	対象学年・クラス数	のべ参加人数
若松区	二島小学校	6年生 2クラス	80名
八幡西区	赤坂小学校	6年生 1クラス	63名
戸畑区	大谷小学校	特別支援学級 1～5年	16名
八幡西区	八幡西特別支援学校	中学部 3学年	25名
小倉南区	葛原小学校	5年生 4クラス	122名
門司区	小森江西小学校	1～2年生 各1クラス	29名

※教育委員会・学校側と感染対策を協議の上、実施

<以下、アウトリーチ事業終了後の先生方とのフィードバックやアンケートの感想より>

- ・コロナ禍の中、申込みことに躊躇いもあったが、子どもたちに何か体験する機会を与えたい思いで申し込んだ。結果、体験中の子どもたちの表情から十分な成果を得られた。
- ・外部の人（アーティスト）と交流することで、子どもたちの潜在的な力を引き出すことに繋がると改めて感じた。



図3 (左) R2「あそびのじかん」



図4 (右) R2「ダンスダイブ～ワークショップ編」

※いずれも令和2年度ワークショップの様子

現状の課題と今後の展開

■自主事業について

コロナ以前と比べると、公演チケットの券売不振が続いていると感じる。劇場においては、ホール収容人数の緩和等、コロナの影響は落ち着き、日常を取り戻しつつあるが、劇場という密な空間での観劇に不安を感じる市民も一定数いると思われるため、引き続きの感染対策の徹底と安心安全な劇場としての周知を行っていききたい。また、学校や地域へのアウトリーチ活動も積極的に行い、且つ、それぞれの活動について、発信にも力を入れることで地域住民への理解と参加を促していきたい。

■事業目的達成のための課題（人材不足と育成について）

北九州芸術劇場は、来年で開館20年目を迎えるが、20年間で様々な人材の入れ替わりがあった。

現在は、着任2～4年目の若い人材を中心に日々業務に取り組んでいるが、職員の入れ替わりに伴うマンパワーの減少や慢性的な人材不足には、課題があるとも感じている。

首都圏と異なり、アートマネジメントを学んだ人材の新規採用者は少なく、OJTを中心とした人材育成には年単位で時間を掛ける必要がある。事業の円滑な遂行やその目的を達成するためには、ある程度の専門知識や経験を要し、ひとりひとりがレベルアップすることで成り立っていくと考える。芸術文化を通して、市民へ豊かな体験や出会いを提供し続けるためには、働く環境の整備や昇給制度など、モチベーションを保てる体制を整えるとともに、代わりの効かない人材を大切に育成していく必要があると考える。引き続き、財団との意見交換や調整も重ねながら、より良い持続可能な組織運営・事業運営を目指していきたい。